

ゲーテのファウストに於ける自由に就て (I)

小野村胤久

序 説

ゲーテのファウスト文献は言う迄もなく、汗牛充棟の感があるが、その自由に就ての研究も最近我が国でも着目され、周到な論考に筆者も大いに啓発されている次第である。

ゲーテの自由に関する見解では、彼が選択の自由・個人的自由・社会的自由の段階を認め、更には行動の自由や思想の自由という区別を挙げているが、彼自身の自由思想の根本はどうであるか。スピノザにより人間の自由について教えられたゲーテは「私には官能及び道義世界を見渡す大きな自由な展望が開ける様に思われた」とのべているが、ゲーテの自由の原型となっているものはその自然観より出た倦むことを知らぬ力、エネルギー即ち実行 (Tat) の精神にあるものと思われる。ゲーテが「我々の永生に就ての確信は、私にあつては活動 (Tätigkeit) の概念から生れてくるのだ。というのは若し私が死ぬまで働きつづけるとすれば今の私の形態が私の精神に耐えられなくなる時に、自然は私にもう一つ別の存在形式を割当てる義務をもつことになるから。」(1824年2月4日、エッケルマンとの対話)と言つたことでも解る様に、彼の全創作活動の主軸になっていると考えられる。ファウストに関しても若きゲーテの時代の原本ファウストより第二部の終りに至る迄この活動的精神より発する自由が貫いて居り、男性の努力と女性の愛により人類は救われるという大理念と軌を一にしている。ファウストの救いは永遠の自由の象徴であり、メフィストとの賭はファウストが真の自由を得るや否やの賭とも考えられる。

ゲーテの言つた選択の自由が行動の自由を前提とするものとするれば、選択の自由は主として意欲そのものに関する概念であり、人格の自律又は自己規定で、行動の動機となる意欲は一定の方向と強度を持つ単純意欲と言え。即ち意欲と身体との間を結ぶ因果性が障碍に出会わずに結果まで到達する時に行動の自由を持つ事になり、選択の自由は意欲の心理的事実の領域内で意欲相互間の関係に於て意欲の選択に妨害をうけない状態である。之が人格的に高められて個人的自由となる。

この個人的自由はその前提である行動の自由が悪い意欲によって起されない限り、社会的意志によって容認され、倫理的に立場に立つ事により社会的自由へと移転して行く。即ち社会的自由は又倫理的自由を前提と言えよう。ゲーテの原本ファウスト (Urfaust) 及びファウスト第一部のある部分には個人的自由、ファウスト第二部には主として社会的自由が示されている。しかし社会的自由は政治的自由と経済的自由に区分して考えられるので、この点ルカーチの様な考え方も出てくる。

藤戸正二氏はファウストに於ける自由の段階を区分して、絶対的自由・制約的自由・審美的自由及び主体的自由の四つとされているが、第一の絶対的自由は自我の自由であつて、ファウストの個人的自由と見られるが、既に第一部の次の言葉にある様に人類の戯曲といわれる萌芽が現わ

れている。

Und was der ganzen Menschheit zugeteilt ist,
Will ich in meinem innern Selbst genießen.

全人類に課せられたものを

私は自分の内にある自我でもって味わおう。

(V. 1770—1771)

グレートヘンの悲劇は彼女の情熱的自由に依りファウストと結ばれる事によって起るが、之も第一部の終りの天上の声「救われたり」という言葉で彼女に真の自由が与えられた事が示される。

第二の制約的自由は既に社会的自由に入立ったもので、個人的自由と社会的制約との衝突によるグレートヘン悲劇も之であるが、ファウスト自身は諦念即ち制約よりするゲーテの活動的懷疑より発する自由を得る。之は悲観主義的洞察と呼ばれ、ここに第一部と第二部との間にギャップが生ずるのである。事実「凡ゆる慰安は下劣であり、絶望のみが義務である」というファウストの言葉には彼の自由が危険に瀕しているかとも思わせるものがあるが、諦念により切り抜け、ファウストは第二部の大世界へ入って行く。

第三の審美的自由は社会の制約的自由が高められて、自我の内在的意志自由と外的制約が調和せるものであって、芸術の世界が問題となり、時限的に見ると、ファウストとヘレナの結婚による古代的永遠の現在と言われるものである。V.9573のアルカディア的自由とは之を指すもので、自然の束縛と囚襲からの自由と共に、ファウストとヘレナの子オイフォリオンは近代文学の象徴であると共に新しき自由の発祥とも考えられる。

第四の主体的自由は更に此審美的自由を超えた完全な動静自在の境地で、自我の最高度の拡大をなし得たファウストは自由の民と共に自由の天地に住む幸福を予感し、人生最高の瞬間を味わうのである。

Das ist der Weisheit letzter Schluss:
Nur der verdient sich Freiheit wie das Leben,
Der täglich sie erobern muss.
Und so verbringt umrungen von Gefahr
Hier Kindheit, Mann und Greis sein tüchtig Jahr.
Solch ein Gewimmel möcht' ich sehn.
Auf freiem Grund mit freiem Volke stehn.
Zum Augenblicke dürft' ich sagen:
Verweile doch, du bist so schön!
Es kann die Spur von meinen Erdtagen
Nicht in Äonen untergehen.
Im Vorgefühl von solchem hohen Glück
genieß' ich jetzt den höchsten Augenblick.

(V. 11574—11585)

元来主体的自由は我々が未来に一定の自由の留保されているという考より発して居り、前述の倫理的自由と似ているが、志賀英雄氏の述べられている様に、ファウストは一切のものへの無限の探究により事物の本質に迫りつつ、其中に全体^(注2)の真理を突止めようとする人間性の最高最博の意志の象徴であって、それには一個の主体的真理が発見されるのである。ルカーチはファウストを人間の文学的現象学 (dichterische Phänomenologie der menschlichen Gattung) と呼ん

でいる。之はヘーゲルがその「精神現象学」に於て弁証論的理性の発見の下に概念の無限的自己運動としての論理により主観的真理を学的に体系づけようとしたのに似ており、この中に自由の概念を求めると、そこに主体的自由の発展が認められるが、ファウスト第二部では究極の真理は「到達し得ざるもの」、「名状し得ざるもの」とされ、又「すべての現実的事象は比喻に過ぎない」(Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis.)とされている時、之は人間的ファウストを離れた神に近い立場に転移したものと見られる。

(注1) 藤戸正二: ファウストにおける自由の段階について (関西ゲーテ協会ゲーテ年鑑 第1巻)

(注2) 志賀英雄: ゲーテの「ファウストの主体性の原理」(同志社大学文化学会文化年報 108-109頁)

ゲーテの自由思想の成長と、ファウストのそれとの相違は一方が人間それ自体の発展、他方は戯曲の性質上の規範という点にあり、ゲーテ自身は真の主体的自由を得ていたと思われるが、ファウストでは単なる予感に止まった。

ゲーテがエッケルマンに(1825年5月12日)語った様に、レッシング・ヴィンケルマン・カントがゲーテよりも、年上で前二者が青年時代に影響し、カントが老年時代に影響を残した事が非常に重要であって、独創性(Originalität)と人が言うものは之等の偉大な先輩や同時代の人々のことをのぞくと何にも大して残っていないことが察せられる。エネルギー・力・意欲が残る丈であるとゲーテは言う。我々の主観中に多くの客観が入りこんでいるからである。この小さな主観を離れ、真に主観的になる事に依り、真に客観的なものと一致して行く。ここに大きな宇宙的な姿、従って真の自由が産み出される。ゲーテが自然観において述べた分極性(Polarität)と高進(Steigerung)もこの意味に解すれば、この根本現象もゲーテ自身ファウストの過程に於いて最高度に発揮したのと言えよう。個人的自由より社会的自由へ、更に之を超越せる真の自由への展開はルカーチがファウストの社会的政治的分析を行いつつも、之を人類の戯曲と名づけている点にも伺われると思う。ルカーチは言う。「ファウストという個人の戯曲が人類の戯曲に発展して行ったのは民間伝説にある民衆自身の想像力・創作力が与って力があり、ゲーテの詩人的活動力が之と緊密に有機的に交互作用を保ちつつ継承発展させて行ったから可能になった」と。之はファウスト第一部のAktionの意味が生の享楽(Lebensgenuss)であるに対し、第二部のAktionが実行及び創造の享楽(Tatengenuss und Schöpfungsgenuss)である事をゲーテが明らかにしている事でも首肯しうる。ただファウストにおける救いの概念は周知の如く初めてレッシングによって取入れられ、Prometheus的な創造的自由を保持し、之がゲーテに継承されて高き自由へと進んで行つたものと見るべきである。

ゲーテの自由は又その宗教観に根底を持つものである。彼の宗教心に於ける重要な契機をなす畏敬(Ehrfurcht)は既に少年時代に見られ、神を直接に神の創造物たる自然中に求めんとし、ファウストではNostradamusの書巻を拡げて大宇宙の示現に接せんとしている。彼は自然の無限の美をPrometheus的な昂揚的な自己感情で生の意味を見出さんとし、遂には既成宗教より背離していた。之は第一部「マルテの庭」におけるグレートヘンとファウストとの対話に見える。

Wenn du ganz in dem Gefühle selig bist,

Nenn' es dann, wie du willst,

Nenns' Glück! Herz! Liebe! Gott!

Ich habe keinen Namen

Dafür!

(V. 3452—3457)

お前がその感じにひたって祝福をおぼえた時に
それを幸福とか、直情とか、愛とか、神とか、
なんとでも気に入る様に名づけたらいいのだ。
私には、なんと叫んだらいいのかわからない。

(相良守峯訳)

即ちゲーテの神は自然内在であると共に超越的で、自然的現実に限られず、最高の比較を絶した高進 (Steigerung) における一つの活々した力を認められる。之とゲーテの自由の根源としての実行力 (Tat) が一致する。神はゲーテにとり、又ファーストにとり、力であると共に愛であつた。神の愛は又神的な力の反面に外ならない、コルフの言う様に、キリスト教は信仰に重点を置き、神への信頼と神々しい慈悲を教え、之は人間の弱点から発しているが、ファーストの宗教は永遠の努力に重点を置き、自らに信頼する様に人間を元気づけるものである。両者とも人生の意味・人間の意味を人間の浄化・高揚・神化に置いているが、浄化はファーストの宗教では積極的性格を持っている。ヨブ記にある様に悪魔が神によって遣わされ、之を克服する事が人間に課せられて居り、ファーストの人間は悪魔との結託に何の恐怖も感じない。主なる神は自由開放的な気持でメフィストに言う。(天上の序言)

Du darfst auch da nur frei erscheinen;
Ich habe deinesgleichen nie gehasst
Von allen Geistern, die verneinen,
Ist mir der Schalk am wenigsten zur Last.
Des Menschen Tätigkeit kann allzuleicht erschlaffen,
Er liebt sich bald die unbedingte Ruh;
Drum geb' ich gern ihm den Gesellen zu,
Der reizt und wirkt und muss als Teufel schaffen.

(V. 336—343)

うん、その時にでも勝手にふるまうがよい。
わしは一度もお前の仲間を憎んだことはない。
およそ否定を本領とする霊どもの中で、
いちばん荷厄介ならないのは悪戯者だ。
人間の活動はとかく弛みがちなもので、
得てして無制限の休息を欲する。

神自身が悪魔に自由を認め、又人間の代表であるファーストにも、より以上の自由を認めている処は面白いと思われる。ファーストが個人的自我を止揚されて、真に自由な社会の一員として活動する時、彼は又一定の宗教的観念からも脱却した自然人の境界にある。既にファースト伝説の通俗本 (Volksbuch) において、ファーストが独逸的性格を示して宗教からの自由を示すと阿部二郎氏が言われたが、この宗教を狭く教會的宗教の意味にとる時はファーストの自由の一種の淵源とも見られよう。

(注3) Korff : Geist der Goethezeit Tl. II S. 397-398.

次に、社会的自由の一環としての政治的自由を見ると、之はゲーテのフランス革命に対する態

度から了解される。ルカーチの言う様に、彼は革命の実行の庶民的な方法を拒否したが、フランス革命の本質的社会的内容を肯定していた。彼は後に削除されたファースト断片中でメフィストに次の様に言わせている。

Bestünde nur Weisheit mit der Jugend
Und Republiken ohne Tugend,
So wär' die Welt dem höchsten Ziele nah.

若者たちと共に叡智が
それに徳のない共和国がありとすりや
世界は最高の目標に近いのだがなあ。

この徳 (Tugend) とはロベスピエールの革命相を指して居り、「自由と平等に就ては大衆と話し合え」と同じ断片中 (Bruchstück 10) にのべられた。自由はしかし個人の欲求であり、平等は社会的欲求であって、社会的平等は明らかに個人の自由を制限する。人間の感情や道徳的欲求のためには、自由と平等は実際には矛盾しない。キリスト教的人道 (christliche Humanität) というのは之で、自由と平等を結び、交互に是認し合っている。トーマス・マンは「ドイツとドイツ人」に於てドイツ人が内面性を重んじ、精神的自由のみを強調し、物質的自由を軽んじたので近世ドイツに政治的自由は発達しなかったというが、18世紀の子であるゲーテはフランス革命の激動中に彼の才能や生産性が犠牲にされるくらい悩んだ。又彼は偉大な個人統率者・明るい人格者のナポレオンに於て彼は革命を愛したのであり、この事はボアスレーにのべたという次の言葉によっても確かである。

「ファーストは私がナポレオンに就て考えており、又考えていたように私をひつばってゆく。自分自身に権力を持ち、主張する人間は最も困難な又最大のことを成就する。それは「秘密」(Geheimnisse) の中に美しく言い現わされている」(1815年 Wiesbaden にて)

更に法則と自由の問題よりファーストを見ると、先づ第一に Wolff がゲーテの「人類の限界」(Grenzen der Menschheit) という詩を挙げているのに注目したい。この詩の第二節に次の如く言っている。^(注4)

Denn mit Göttern	それ如何なる人も
soll sich nicht messen	神々と己が身を
Irgend ein Mensch.	くらべ、計るべからず。
Hebt er sich aufwärts	たとい人ひたに登り高めて
und berührt	果ては額を星に
Mit dem Scheitel die Sterne,	触るる境になるとも
Nirgends haften dann	いづこに地をふむに由なく
Die unsichern Sohlen,	徒にただ雲と風の
Und mit ihm spielen	もてあそびともならん。
Wolken und Winde.	

(芳賀檀訳)

Wolff はこの節が意識してファーストに関して書かれたもので、第一段はファースト自身に当てはまり、明白な言葉で人類の限界を越えようとする試みを示し、之に続く段は Wagner に見るようなファーストにより軽蔑された専門知識を示すものであると言っている。ファーストは知る価値のないものを知っているが、この限られた知識は人間に明けられている唯一の種類の知識

である。この知識の限界と同様に狭いのが道徳的能力の限界といえる。即ち人間は道徳的に行動するのは自由であるとは思うが、実際に人間の行動は神の摂理により規定されている。ゲーテは此宿命 (Prädestination) の思想を一層鋭く「神々しきもの」(das Göttliche) という詩で強調している。

Nach ewigen ehernen,	常在不滅の
Grossen Gesetzen	大法に則りて
Müssen wir alle	人の兒等みな
unseres Daseins	我等が生の際の
Kreise vollenden.	完きを果さねばならぬ。

この意味での法則は道徳律でなく運命の法則である。即ち法則はこの場合 Sollen でなく、Müssen となる。之はゲーテが Prometheus に於て用いた運命の概念と同一であると言えよう。すべての行為 (Handeln) は欲望 (Begehren) を前提とし、欲望は性格と外部的事情との合同運動 (Zusammenspiel) より発展すると考えられる。人間は知性 (Intellekt) から行動し得る時のみ自分が自由であると名づけてよい。熱望 (Begierde) の影響なくして自発的理性に適った意欲が出来る時でもそうである。かくして法則に依り行動する事は少くともその人の内面性が明白に秩序立てられ、追求すべき道を自覚する限りにおいて、人間に、その運命に対しての自由感情を与える。ゲーテの倫理は倫理的価値概念としての自由なくしては考えられない。自由は人間に贈られたものでなく、獲得され、かち取られるべきもので、之は法則に絶対に服従する事によりて行われる。

ファウストのテーマとするところはコルフの言う様に彼の暗い衝動の内面的無限性から人生の外面的無限を求め、この無限の望みから人生の有限な限界につき当る生の美と呪いであるが、ファウスト的人間をその運命の前に守り、呪いから解く一つの方法が残されていた。ファウストもヴィルヘルム・マイスターやゲーテ自身と同じ発展を享けねばならず、人間の限られた立場から見れば世界は混沌 (Chaos) であるが、この Chaos の意味と法則を発見するには高度の認識能力を要する。ファウストは人間の世界苦 (Weltschmerz) より出発して、満足 (Befriedigung) の状態に達するが、之は単なる自然の満足を得られなかつたファウストが終局に道徳的満足を得られた事を示している。しかしファウストにとつては道徳的自己満足では十分でなく、客観的にも救われねばならない。ファウストも悪魔と結託して罪を重ねているから、この作の結末では神の前での弁明が必要になる。「人間は努力する限りは迷う」と神はメフィストに言つたが、この迷誤は真理に至る通過段階 (Durchgangsstufe) である。そこでファウストの弁明の根底にある人世観の決定的な思想は人生の法則がその非合法性を含んでいる事である。人生はその迷誤を正して完成にまで持つてゆく必要がある。若し迷誤が迷誤に止まり、罪 (Sünde) が罪に止まる場合には最高の見地に於て法則の Idee に犯罪者 (Verbrecher) の Idee が必要である許りでなく、合法性を得んと努力する Leben のイデーにも自由の Idee が必要であり、之が生をその迷誤から救済し、法則を問題にする事により、新たに之を力強く、生き活きさせる。之にもファウストの救いの Idee があるものと考えられる。

(注4) Hans M. Wolff : Goethes Weg zur Humanität. S. 229—232.

尚ファウスト悲劇として筋の方から見ると、ファウストの賭の問題と自由との関連がある。之

に就てはリッケルト其他の人々により論議されたが、最近小堀桂一郎氏により深い分析が行われた。賭に於てファウストは自分の死後の魂を担保に入れた事になっているが、直接にはメフィストに自己を託し、従つて自分の人格的自由又は実体的自由を賭に投じた事となる。之は初めは個人的自由の問題と考えられたが、ファウストが自己の自我の全人類的な拡大を願ひ、之によつて規模壮大な結末に達する時には、主体的自由即ち人類全体の自由の結末を語るものと考えられる。而してファウストが手段としてメフィストから貸与された Magie は中世的幻術・魔法から近代的な技術即ち機能的自由にと転換して行く。しかし、ファウストの賭けた人格的自由とこの機能的自由により、いわゆる行動の自由が完成されるものとするファウストの自由自体に一つの矛盾が生ずる。それはファウストが一面に於てこの Magie を遠ざけようと努めていたからである。この矛盾の中にファウスト悲劇の中心がある様に思われ、賭の勝負の問題が更に自由が喪失するか否かの問題となって来る。ファウストの巨人的努力・活動性は最後まで続くので、之は又ファウストの救いとも関連を持つことになる。ファウストの救いは天上での救いであるから地上の賭の勝負とは関係がないとも言われるが、ファウストの死後の魂が賭の担保となっている以上この問題は極めて複雑である。ファウストが悪魔の精神に滲透されて、彼の人格的自由が失われたと見る時、彼は賭に敗れたと考えられるが、彼の入れた担保はどうなるのであろうか。この場合にも自由が全然失われたとは断定し難く、メフィストの最後の態度はどうも会得し難い。反対にファウストが全人的努力に依つて、メフィストの企図した罪を犯しつつも、悪魔の世界を共に含む様な小宇宙の境界に達したとすれば、ファウストは外観上賭に敗れたとしても実質的に勝つた事になり、自由の灯が明るく輝くのである。

Die Nacht scheint tiefer tief hereinzudringen,

Allein im Innern leuchtet helles Licht.

(V. 11499—11500)

という言葉はファウストの心眼の開けたことと共に自由の開けたことを示すものといつてよいであろう。しかし之等の問題は更に詳細な検討を要すると思われる。(続く)

(注5) 小堀桂一郎:「ファウスト」の地上の賭に於ける賭物の問題(日本ゲーテ協会発行 ゲーテ年鑑第2巻)

参 考 文 献

Kuno Fischer : Goethes Faust, 1901.

G. Witkowski : Goethes Faust, 1929

Heinrich Rickert : Goethes Faust, 1932.

Thomas Mann : Das Problem der Freiheit, 1939.

〃 〃 : Deutschland und die Deutschen

Adolf. Trendelenburg : Zu Goethes Faust 1919.

Georg Lukács : Goethe und seine Zeit, 1947.

Goethe über den Faust, Hrsg. Von Alfred Dieck, 1958.

Reinhard Buchwald : Führer durch Goethes Faustdichtung 1947.

三本正之: ゲーテに於ける自由の問題(鹿児島大学文理学部研究紀要文科報告第一号 1952)

志賀英雄: ゲーテの「ファウスト」と主体性の原理(同志社大学文化学会編 文化学年報第参輯)

藤戸正二: ファウストにおける自由の段階について(関西ゲーテ協会発行、ゲーテ年鑑第1巻)

藤戸正二: 「ファウスト」の様式諸問題 (日本ゲーテ協会発行、ゲーテ年鑑第2巻)

小堀桂一郎: 「ファウスト」の地上の賭に於ける賭物の問題 (同上)

高桑純夫: 人間の自由に就て (岩波新書)

(昭和35年11月30日受理)

Resumé

Über die Freiheit in Goethes Faust (I)

Einleitung

Tanehisa Onomura

Goethes Faust ist nicht nur ein persönliches Drama von der Seite des Faust, sondern auch ein Drama der Menschheit, wie Lukác sagt. In Hinsicht auf die Freiheit hat Goethe die Freiheit der Wahl, persönliche und soziale Freiheit erkannt. Was aber den Grund seiner Freiheit im "Faust" macht, ist sein Gedanke über die Tätigkeit, ewig strebende Handlung, immer unermüdliche Kraft und Energie, die von seiner Naturauffassung ausgeht, wie er ihn zu Eckermann gesprochen hat. In seinem "Faust" ist dieser Gedanke ganz durchdrungen und stimmt mit dem grossen Ideal zusammen, dass die Menschheit durch das Streben des Mannes und die Liebe des Weibes zu erlösen ist. Faust geht durch alle Stufen der Freiheit von der persönlichen bis zur sozialen und ästhetischen, doch die höchste Stufe, d. h. die subjektivierte Freiheit ist ein vollkommen Bewegung und Ruhe beherrschender Zustand, wo Faust ein Symbol des höchsten und weitesten Menschentums, das der Wahrheit durch das unendliche Forschen nach dem All auf den Grund kommen will. Auch ist das Urphänomen, Polarität und Steigerung, das Goethe in seiner Naturforschung betrachtet hat, in seinem "Faust" in höchstem Masse vorgestellt. Denn Polarität ist als eine Art persönliche Freiheit und Steigerung als eine allgemeine hohe Freiheit zu betrachten. Und die Freiheit im "Faust" hat seinen Hintergrund in einer Religion. Die Faustische Religion legt allen Nachdruck auf das ewige Streben. Sie ermutigt den Menschen sich selbst zu vertrauen. Sie rechnet mit der Stärke des Menschen, wie Korff sagte. Was die politische Freiheit im "Faust" betrifft, sei hier sie hervorgehoben, Goethes Ansicht über Französische Revolution und über Napoleon, wie Goethe sie zu Boisserée sagte. Faust geht von den Weltschmerzen aus und erreicht ethische Befriedigung, die zur objektiven Erlösung führt. Über die Wette im "Faust" ist zwar viel diskutiert, doch ist mit diesem Spiel die Frage verbunden, ob Faust, Vertreter der Menschheit seine Freiheit verloren hat oder nicht. Dies ist die schwerste Aufgabe, welche noch näher zu betrachten ist. (Fortsetzung folgt.)